実践報告　総合的な学習の時間（CHANGE）

わたしたちのくらしとSDGs

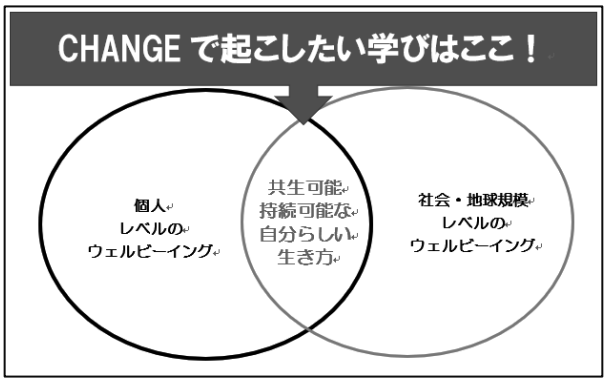
和歌山大学教育学部附属小学校　中山　和幸

１．はじめに

本実践は，「SDGｓにかかわる地域の課題の解決」にかかわるプロジェクト学習である。

まず，なぜ，「SDGs」を総合的な学習の時間で扱うのか。それは，「流行」だからでも，「社会の要請」だからでもない。総合的な学習の時間（本校では，CHANGE）において，子どもがよりよい自己の生き方を考え，実現する上で「SDGs」が重要な役割を果たすのではないかと考えるからである。

「よく生きる」という意味の言葉で近年「ウェルビーイング」という言葉をよく耳にするようになったが，まさにこの「ウェルビーイング」を子ども自身が構想・実現する上で，SDGs は，一人一人の子どもに「共生」「持続可能」といった視点を提供してくれるものであると考える。そのことによって，子どもは「自分勝手」に陥らない，「共生」「持続可能」を視野に入れた「自分らしく生きる」ということを実現していけるのだと考える（右図）。



２．　実践の具体について

（１）単元構成について

本単元（全 62 時間）は，以下の３つの小単元で構成されている。

STEP１：ヒラメの飼育・放流に取り組もう（17 時間）※１学期

SDGs14 番「海の豊かさを守ろう」にかかわりの深い，和歌山県内の海洋環境の悪化，水産資源の減少といった地域課題を自分たちの解決・解消すべき問題であると考えた子どもたちが，地域の専門家（その道のプロ）とかかわる中で，水産資源を増やす取り組みとして，ヒラメの飼育・放流に取り組む。

連携する地域人材：北部（加太）栽培漁業センターの方

STEP２：イサキ・クエの飼育・放流に取り組もう（29 時間）※２学期

ヒラメの飼育・放流で達成感・やりがいを味わった子どもたちが，さらに飼育難易度の高い，イサキ・クエの飼育・放流活動に取り組む。イサキ・クエの生態，習性の違いから海の生き物の多様性を実感する。また，生き物の共生の視点をもって活動する。

連携する地域人材：北部（加太）栽培漁業センター及び南部（串本）栽培漁業センターの方

STEP３：アマモの栽培・植え付けに取り組もう（16 時間）※３学期

イサキ・クエの飼育・放流で達成感・やりがいを味わいながら，生物の多様性を実感したり，共存・共生の視点で海洋環境を考えたりし始めた子どもたちが，アマモの栽培・植え付けに取り組む。「豊かな資源＝魚の種類や量が増えること」と捉えていた子どもたちが，「生態系のバランスがよい，海の生物がすみやすい環境がある」といったことも海の豊かさであると考えるようになる。

連携する地域人材：北部（加太）栽培漁業センター，和歌山工業高等専門学校の先生

（２）学習の流れ

①磁観察、栽培漁業センター見学

・和歌山の海の豊かさを実感

・海の資源を豊かにする取り組みを知る

②STEP１：海の資源を豊かにするために ヒラメの飼育・放流をしよう

①興味関心 → ②課題設定 → ③課題解決 → ④振り返り

③飼育・放流活動

・飼育方法の情報収集

・ヒラメが住みよい環境の実現

・放流

④海の資源は豊かになったのかな？ まだまだ活動を続ける必要がある！

⑤課題設定 → ⑥課題解決

⑤STEP２：海の資源を豊かにするために イサキ・クエの飼育・放流をしよう

⑥－1 イサキとクエの混泳

・クエがイサキにかみつく事件発生

⑥－2　仕切りをつくる

・イサキとクエを仕切りでわける

⑥－3　病気対策

・白点病でクエが残り２匹イサキは全滅

・再チャレンジするか悩む

⑥－4 再チャレンジ放流

⑦振り返り

⑦海の資源は豊かになったのかな？ 放流後の魚が住みよい環境を整える必要がある！

⑧課題設定

⑧STEP３：海の資源を豊かにするために アマモの栽培・植え付けをしよう

３．実践の考察

９月 22 日は，イサキやクエが大量に死んでしまった日である。死因が，白点病の蔓延であることを知ったこの子は，「自分の勉強不足」「行動力不足」について振り返っている。今の自分の生き方が「イサキやクエとの共生」や「持続可能な飼育・放流活動」といった視点で考えると，望ましくない状態であることに気が付いた様子が窺える。この後，この子は白点病対策について家庭でも調べ学習を行い，休み時間や放課後も熱心に観察したり，水替えを行ったりする姿が見られるようになった。

またある子は，大量のイサキの死をきっかけに，これまでの自分の努力が「最低限の努力」であり，今後は「最大限の努力」をしようと心を新たにする様子が窺える。この後，この子は，水槽の前にいる時間が長くなり，餌の食べ残しを網ですくったり，水質検査を行ったりし，進んで水質管理を行う姿が見られるようになった。

本実践においては，海水魚の死が自分の生き方を見直す大きなポイントとなっていた。個人のウェルビーイングを追究するのではなく、イサキやクエにとってのウェルビーイングを追究するようになった瞬間であったのではないかと考察する。

９学期の実践は、まだ始まったばかりであるが、アマモの栽培・植え付けをとおして，「豊かな資源＝魚の種類や量が増えること」と捉えていた子どもたちが，「生態系のバランスがよい，海の生物がすみやすい環境がある」といったことも海の豊かさであると考えるようになることを期待している。

9月22日の振り返り
昨日、イサキを死なせないための今後のことについてや、死んだ原因を調べたり考えたりしました。まずは、白点病という先生のお知らせがありとても残念でした。もう少し早く気づいてあげれば良かったと反省しています。あと、白点病は他の魚のうつることを知らなかったので勉強不足でした。今日からでも、いっぱい調べて知識を貯めていこうと思います。私は、考えてばかりで行動していないので考えてばかりいずに行動して、観察して今残っているクエとイサキを大事に育てたいです。命を甘くみずに気を引き締めて残りの期間で頑張りたいです。

振り返り

自分はイサキ45匹を死なせてしまいました。それで死んだ原因は、自分らにあると思いました。
それは、分かっていたのに、直そうとせずに、休み時間は外で遊んでばかりでした。それで自分は自分のことがひどいなと思いました。
栽培漁業センターにいたら、なくならなかったと思ったからです。
　CHANGEっていうのは、「変わる」ことなのに、えさをあげるだけなど、最低限のことしかできていなくて、「変わる」はずがないと思いました。だから、自分は考え方などを見直そうと思いました。
　最低限のことだけだったら、また同じことになってしまうと思うから最大限の努力をしたいと思いました。
　例えば、休憩時間もイサキのために使ったりして、いい環境をつくってあげるのがいいと思いました。
　イサキのために最大限努力することは、イサキのためだけじゃなくて、自分のためにもなると思うから、最大限の努力をして、二度とイサキに苦しい思いをさせないようにしたいなと思いました。